

## 続・成尋の『日記』を読む

### 『参天台五台山記』の人物群像

井上泰也

1

筆者は、先に、成尋の『日記』、『参天台五台山記』全八巻（一〇七二年三月十五日—一〇七三年六月十二日）を取り上げ、その豊富な金銭出納の実体に対して、一先ず大局的な把握を試みた<sup>①</sup>。廃仏の中で辛酸を嘗めた、かの先達円仁に比すれば、成尋の旅は、誠に度重なる僥倖に恵まれたものであったといえよう。すなわち、成尋の銅銭総収入、約三三七貫文のうち、実に80%に相当する約二七〇貫文は宋朝からの支給金であった。この数字は、銅銭総支出、一九七・六貫文（恐らく龐大な記載洩れがあったと思われるが）を加えた出納規模全体でも、優に50%に達している。又、当時、一足約二二〇〇文に算定される絹の場合も、総収入二六六足のうち、98%相当の二六〇足が宋朝から下賜されたものであった。

国家的恩寵に彩られた、成尋の旅のかかる性格は、当『日記』を、宋代社会史のための生きたドキュメントとして捉えた時、一定の限界を示すものかも知れない。だが、比較的大まかな収入構造とは対照的に、夥しい登場人物たちが織り成す、どちらかといえば微細な金額の集積たる支出方面に眼を転じるや、当『日記』は宛ら、一僧侶の見た宋代社会のパノラマといった感を呈するのである。取り分け、成尋を取り囲む日常

的人間関係を濃密に反映する、礼金・心付け・チップや各種贈与等、総計約六一・七貫文（天台山国清寺食堂の少女から五台山奉納に至る成尋自身の布施の他、鍛冶・象師・木材等の雑費を含む）は、金額の上では支出の31%、出納全体の12%に過ぎないけれども、件数では銅銭出納総数三三〇例（斎銭・支給金等は取り纏めてカウントした）のうち、ちょうど50%に当たる一一五例を数え、当『日記』金銭出納の最大の特徴といわなければならない（以上、表A 銅銭出納の件数 参照）。

筆者は、当初、沙金・銀・水銀等に寄せる関心から、当『日記』に接近したのであったが、情報量が豊富な上に人間関係が複雑で、決して一筋縄では行かないことを痛感させられた。実の所、『日記』中に往還される財・サービスの総量にとつて、沙金・銅銭等、通常貨幣と見做される物質の働きは、ほんの表層に過ぎないのではないかとさえ思われるのである。そこで、本稿では、こういった働きを見極めるためにも、『日記』中の登場人物に対して、やはり大局的な把握を試みると共に、併せて前稿の補訂を果たしておきたい<sup>②</sup>。なお、現在、複数の著者による『日記』訳注本が進行中と聞き及ぶ。この堅牢かつ卓れて緻密な史料も、漸く基礎工事の段階を終了しつつあるのかも知れない。本稿が、かかる作業に少しでも寄与出来れば幸いである。

表A 銅銭出納の件数

総支出197,600文 総収入337,049文

出納項目	vol.1	vol.2	vol.3	vol.4	vol.5	vol.6	vol.7	vol.8	件数(計)	件数(%)	金額の出納及び全体に占める割合(%)		
衣料・香料費	5			5	1	1		2	14	6.0	33.4(支出)	12.3(出納全体)	
飲食・沐浴費	6				2	1	1	2	12	5.2	0.8( )	0.3( )	
交通費	船	2						4	6	2.6	1.4( )	0.5( )	
	馬				4		3	2	10	4.3	19.4( )	7.2( )	
	轎	6	3					1	10	4.3	1.8( )	0.7( )	
	人夫	2	1					2	7	3.0	2.6( )	0.9( )	
	宿	3		1		1			5	2.2	0.3( )	0.1( )	
礼金・贈与等	兵士			2	1	5		2	5	6.5	1.8( )	0.7( )	
	使者	3		4	2	2	5	6	6	28	12.2	4.5( )	1.7( )
	司家				4	1	4	4		13	5.7	9.0( )	3.3( )
	客省司					1	5			6	2.6	2.5( )	0.9( )
	陳詠				2	1				3	1.3	2.0( )	0.7( )
	その他	2	6	2	2	15	2	13	8	50	21.7	11.3( )	4.2( )
典籍等						3	5	5	13	5.7	9.2( )	3.4( )	
両替	2								2	0.9	4.1(収入)	2.6(出納全体)	
齋銭・布施	6	6		1	1	2	2	3	21	9.1	10.4( )	6.5( )	
借用	1								1	0.4	0.9( )	0.6( )	
宋朝			1		10		1	1	13	5.7	80.2( )	50.6( )	
その他(馬売却)					1				1	0.4	4.5( )	2.8( )	
	38	16	10	21	41	26	38	40	230	99.8	収支合計534,649文		

## 2

では、先ず、『日記』の登場人物総数及び人的構成について、前稿と同様、円仁『入唐求法巡礼行記』全四巻と併せた形で、取り纏めを行ないたい(巻末表B 両『日記』の人的構成 参照)。

集計基準は、凡そ以下の通りである。

確認不能な群衆・大人数は、原則としてカウントしない。円仁の場合、淮南節度使軍事パレードの騎馬・歩兵総計千人(八三八年九月二十三日 巻一)、李徳裕開元寺訪問時の歩兵二百人以下の文武眷属たち(同年十一月八日 同)、山陵使の行列と五里に列なる兵士たち(八四〇年八月十九日 巻三)、拜命左金吾衛大將軍の行列(八四一年一月六日 同)、武宗南郊壇行幸時の十六衛・神策軍総勢二〇万人(同年一月八日 同)等がそれに当たる。成尋の場合も、夜たけなわの杭州盛り場と供数百人及び轎子・腰輿各十余乗を引き連れた都督夫人の行列(一〇七二年四月二十二日 巻一)、延和殿朝見(同年十月二十二日 巻四)、太平興国寺南大門を通過する神宗出駕焼香の大行列(一〇七三年一月十三日 巻六)、後苑瑤津亭粉壇祈雨道場周辺を見学する公卿たちや遠景に垣間見られるきらびやかな女性たち(同年三月三日 巻七)等は、ごく僅かな人数を拾うに止め、殆どを集計外とした。

当然のことながら、両『日記』に頻出する盛大な法要・齋会・講説、寺門の賑わい等も、特筆される人員を除けばカウントしていない。又、比較的限定された数字でも、「十余人・十有余・十人來許」といった表記はカウントしなかった。個々に明かされる人名との、重複を避けるためでもある。

成尋の場合、文書署名者や伝聞人名だけでも、その情報は貴重かつ膨大だが、ここでいう登場人物とは、直接彼の筆に登りなおかつ実見した

人物である(巻末表C 成尋『日記』の登場人物 参照)。本表人名は初見のみを掲載する。又、『日記』原文に何らかの人名情報を伴い、複数回数登場する人物一六六名(スクリーン・トーン)については、登場順に人名索引を付載した。但し、二回目以降の登場に関しては、人名索引の用を成すためにも、文書・伝聞を含めた全ての登場を網羅するようつとめ、結果的に実見が一回限りの人物も含まれている。例えば、「中書門下牒」署名者として登場する王安石は、仇名と思しき「王將軍」なる異聞も伝わり興味をそそられるが(一〇七三年四月四日・五月四日 巻八)、実見の形跡は無く本表から洩れる。これに対し、「杭州公移」に「通判蘇」と署名する蘇軾は、後に「通判学士」として正に一期一会の邂逅を果たすのである(一〇七二年六月五日 巻二・一〇七三年五月二十二日 巻八)。

又、一六六名には、例外的措置として、院書生(司家)三名、客省司官人六名、行事大保・官勾行事各三名、計一五名を加えた。前二者については各一名、後苑祈雨行事係については四名程度、関係者の名が分かるに過ぎないのだが、何れも当『日記』に特徴的な登場人物である故、かかる処理と相成った。後苑司は祈雨要請状に六名が署名(一〇七三年三月一日 巻八)、後苑の勝にも六名が名を列ねているが(三月二日、実際の登場人物との対応関係は、今一つ判然としない。三者共、実際の登場場面に即しながら、便宜的に処理したことを断わっておく。

さて、円仁六二五名・成尋二〇五四名の登場人物総数(当人自身も各々一名)は、円仁10.4%(遣唐使節団構成員)・成尋0.68%(弟子僧七名や見送り僧たち)の日本人及び、円仁に特徴的な19.5%の新羅人(遣唐使船乗員を含む)を除けば、ほぼ唐・宋期の中国人ということになる(インド等の外国人僧は、円仁は人数の多い新羅僧、成尋は宋僧にそれぞれ合算した)。

円仁四三八名・成尋二〇四〇名の唐・宋人は、極めて大まかであるが

僧・官・俗人に三分類し、円仁33.6・48.4・18.0%、成尋22.9・68.4・8.68%の割合となった。誠に当然のことながら、一般民衆に対して僧侶の数は多く、日本人及び新羅人を加えた全体でも、円仁40.3%・成尋23.5%となる。因みに、成尋人名索引一六六名についていえば、更に実際の密度を反映して、僧65.7%(一〇九名)⑤、日本人僧八名を含む)・官25.3%(四二名)・俗9.04%(十五名)のうち十名は貿易に従事する船頭たちである)となるのである。

官吏との折衝・交流は、両『日記』に共通する特徴であるが、取り分け成尋の場合、その数は桁違いに多い。但し、このことは著名な高位高官よりもむしろ、官属下部・行政末端の人員による所が少なくない。すなわち、上京行における官送人夫・遞送兵士・船人たち(巻三)、五台山巡礼行における遞送兵士(各二〇〜四〇名)・馬鋪担夫(各約一〇名)たち(巻五)。五台山巡礼行における円仁一行四名は、ロード・ムービーよろしく駅館よりも店家で、あるいは一般民家の軒先で雨露を凌いだ(駅館は官、店家は俗に分類 巻二・三)⑥。これに対し、成尋一行十名が店家に宿泊したのは、供奉官の先宿により駅が塞がっていたたつた一日に過ぎない(一〇七二年十二月二十四日 巻五)。

五台山往復の遞送兵士が、区間ごとに殆ど同じ顔触れであった公算は高いであろう。しかし、名が明かされない以上確認不能で、登場ごとに加算する他なかった。このような延べ人数的処理はここに止まらず、天台山における輜担(巻一・二・三)、両浙転運司官人たち(巻二・三・八 長官姓名・下屬等不詳)⑦、首都開封における馬人(巻四・六・七・八 借馬の出費がかなりの金額に昇ることは、前掲表A参照)、伝法院における行者たち(巻六・七・八 一〇七二年十月二十日条によれば、当院は僧五十人・行者七十人を擁する由)等、遺憾ながら同様の把握に終始せざるを得なかったのである。

両『日記』に登場する女性たちが、僅少なことはいうまでもない。す

なわち全体で、円仁1.92%（十二名）、成尋0.83%（十七名）であった。円仁の内訳は、尼八名・老婆二名（尼三名と老婆二名は赤山法花院常住者 新羅人）・家婦二名で、純然たる俗人は最後の二名だけである。共に五台山への途次で登場（巻二）、一名は円仁一行を罵り、一名は旅僧を懇切に慰勞した。成尋の場合も、尼四名・官人妻二名（前出都督夫人と鄭珍の娘で雍丘県官人の妻）・官人乳母一名・俗人十名（前出少女一名、成尋に志与せる老女四名、葬儀の泣女三名、童子を連れた女一名、寺で講師と誦和する女一名）である。又、人数が不明瞭で集計外としたが、吳充家の女房たちは、『日記』中に屢々逢着することながら、成尋随身の念珠を所望したのであった（一〇七三年三月二十一日 巻七）。

僧侶たちの民間との接触は、押し並べて稀薄である。成尋の『日記』には、実質的に庶民層と大差の無い官属下部たちが多数登場するとはいえ、やはり社会史の史料としての一定の障壁は否めない所であろう。

## 3

成尋が、「容貌最も貴人と云ふべし」と記す、知太原府劉庠は、さすがの風格を漂わせて印象的な官僚である。嘉祐二（一〇五七）年に進士及第、監察御史裏行・右司諫・河東転運使・河北都転運使・知開封府等を歴任、遂に奉使して契丹問題に精通する一方、二股河治水事業には理に適った対応を見せ、又、河東では鉄の増産や塩・明礬の販売促進につとめる等、頗る実務に明るい人物であった。新法を押し進める王安石に与せず、知太原府に転出するのは、熙寧四（一〇七二）年のことである。

翌年末、五台山往復の途次、太原府に立ち寄った成尋一行は、劉庠から行き届いたもてなしを受けた。すなわち、人形が捧げ持つ、凝った造りの銀製香鑪が立ち並ぶ齋所では、銀器に盛られた豪華な食事が次々と運ばれ、成尋に「真実第一の齋なり」と書かせている。銅錢十貫文の他、

防寒衣料・路次食料・酒等の志も、往復併せて格別の多さであった。その成尋用紫皮裘かわしんせの送り状には（一〇七二年十一月二十一日 巻五）、  
伏願、女樂安郡太君李氏、増延慶寿。

と記され、劉庠の母に関する貴重な情報となっている。彼女は二年後に他界するが、この実務派官僚の（元祐元 一〇八六年、64歳で死去）、老母に寄せる心情を、成尋は見事に掬い取っていたわけであった。

成尋が行く先々の官僚たちから教学上の質問を受け、法門問答・仏教談義が交わされることは、筆者には少なからず驚きであった。すなわち、台州では通判郎中（安保衡）・司理秘校・知州少卿（錢暄）・司理官・転運司官人（一〇七二年六月一日・二日・三日・閏七月十八日・二十二日 巻一・二）、天台山及び天台県でも、知県・推官秘書・明州推官（六月二十七日・七月二十一日・閏七月七日 巻一）から質問され、台州通判などは成尋持参の『観心注法花経』四巻を引続いて借りる熱心さであった（六月一日・十一日・閏七月六日・二十二日 巻一・二）。同様の事例は、開封での吳充（前出）・王中正（一〇七三年四月一日 巻八）、楚州での朱判官（四月二十六日 巻八）等にも認めることが出来、必ずしも台州及び天台山に特有の、寺刹の多い土地柄によるものばかりとは片付けられないのである。

さて、熙寧五（一〇七三）年は、同四年、王安石によって行なわれた科挙制度改革⑭（科目の進士科 経義中心 への一本化、経義・論・策の試題化）の直後であり、又三年に一度の解試実施年に当たっていた。同年五月以来、天台山国清寺に滞在していた成尋は、一度目の台州訪問の際、期せずして解試を間近に控えた受験生たちと遭遇することになるのである（巻二）。

すなわち、閏七月十七日、成尋の台州での宿舍、国清寺廨院へ、先ず明州の秀才四名が来宿、八月の解試を目前にした彼らと、異色の交流が

始まった。来宿の理由について、司理官の子の秀才は、次のように手際よく説明している。

明州・温州・台州の秀才は、すべて台州に赴き解試を受験します。五百人以上の受験者のうち、十七人が選抜され（3.4%）、来春、都での省試・殿試に臨みます。合格して官職を授けられるのは三人、五百人の秀才中、ただ三人のみが官となるわけです（0.6%）。全国の秀才約二十万人のうち、合格して官となるのはただ三百人、千人中一人が選抜される勘定（0.1%）となります。

因みに、来春、すなわち熙寧六（一〇七三）年の、省試進士科合格者数は、四百八人（殿試正奏名三四八人）と報告されている。⑤ 続いて、翌十八日には、温州の秀才七名が来宿、そして翌十九日、成尋は先の明州の秀才より、次のような質問を受けた。

仏還りて生死の人となるか。  
これに対して成尋は、

この問甚だ深し。菩薩重玄の門に入り、凡事を倒修すといえども、生死の人とならず。仏あに本覚を忘れんや。

と答えている。彼らの教学上の質問は続き、翌二十日には、同じく明州の秀才から六問、又明州の拳人（解試合格者）姚孳から五問が発せられ、成尋は逐一筆談により解答した模様である。二十二日、明州の秀才は、成尋に向けて、

達磨西より来たり、九年法を弘む。

国師東より至り、その言句を伝う。  
と、些か大仰な讃辞を送っている。

既に、国賓として、首都開封への召喚が決まっていた成尋に対して、受験生たちが寄せる心情は、並々ならぬものがあったようである。そして、更にいうならば、彼らの教学に対する強い関心は、異国の高僧に寄

せる旺盛な好奇心や土地柄によるばかりではなく、新法時期、王安石を筆頭として官僚たちの仏教への傾斜が半ば公然たるものとなり、その学術的影響が科挙受験場にまで浸透しつつあった事情を、早くも敏感に反映した一齣であったとも受け取れよう。二十三日午後、受験生たちは、一旦は国清寺に戻るものの、間もなく開封へ向けて旅立つ日本僧を、台州城朝京（天）門外で見送った。

なお、『日記』には、この後も四名の科挙受験生が登場する（台州での十三名と併せ、計十七名 宋人0.83%・官1.22%）。鄭珍の子の秀才（一〇七二年八月十三日 卷三）、人相見の心得がある登州秀才（九月十七日 同）、明州拳人汪鎮（一〇七三年二月十九日 卷六）、揚州？秀才（四月十五日 卷八）である。

年が改まり、弟子僧五名を先発させ、祈雨のつとめを果たし、新経を受領した成尋は、宋朝手配の船に乗込んでいた（当初の揚州船が手狭なため、更に別船を手配したか 三月二十三日・四月二日）。船中には、懇意の梵才三蔵に頼まれた越州に行くという大相国寺の徳高大師（三月二十五日）、逆に梵才三蔵から貰い受けた形かと思われる伝法院の張行者（三月十三日）、杭州へ行くという万歳院の律師一名（三月二十九日）の他、もう二・三人何とかありませんかという僧の頼みさえ断わっていたにも拘わらず（四月十二日）、どっという手蔓を辿ったものか、揚州？秀才（前出）の顔もあった。

当秀才は、成尋との間に問答が交わされるわけでもなく、他の大多数の登場人物同様、個人的プロフィール等も一切不明であるが、事の成り行きから見て、次のように推測することが出来ようか。揚州出身の彼は、何らかのコネクションを利用し、合格率の高さから受験生に絶大な人気を博していた、開封府解試乃至は国子監解試に臨んだ。しかし、事は不首尾となり、そのまま数ヶ月に亙り、済し崩し的に開封に滞留したもの

の、そう何時までも申し掛かる経済的負担に耐え切れるものではない。かといって帰郷するにも金が掛かる。聞けば、最近知り合った陳詠が、日本僧と共に大運河を下るといふ。南の親族が法外な特別料金を支払うという話に、陳詠はまんまと乗って来た。実際に記されている内容は、凡そ以下の通りである。

五月二日、揚州到着。知州(王居卿)より白米三斗・酒四瓶・麪粉<sup>こむぎこ</sup>二斤を送られる。

三日、新経の曝書作業に明け暮れる。

四日、揚州府・開元寺・寿寧寺・竜興寺訪問。

五日、別船への乗換えが終了したが、牒が到来せずまだ出航出来ない。

陳詠は秀才の銭十五貫文の件で手こずっている。夕刻、使臣劉政(殿直)が文書を手にしてやって来る。

六日、出航。牛十頭による曳き船で瓜州の堰を越える。

七日、陳詠帰船。僅かに銭一貫半を受け取っただけだといふ。件んの秀才は姿をくらませた。長江を渡る。

杭州では、船旅のストレスからか、張行者(無錫県出身 五月十二日)が施十郎(通事)と喧嘩口論に及び、徳嵩大師からは話にならぬといわれ、劉政からもあの人は手に負えませんといわれる始末であった(五月三十日・六月一日)。

船の行くてには、飄々として何処かユーモラスな、宋代の風景が広がっている。

拙稿「成尋の『日記』を読む」『参天台五台山記』の金銭出納」  
『立命館文学』五七七、二〇〇二年)。以下、主に表D(銅銭出納の内訳)を参照。後掲表Aは、本表を改編したものである。

先ず、拙稿、注・に列記した研究論文の遺漏を補い、併せて最新の研究成果を追記しておきたい。

続・成尋の『日記』を読む

(1) 藤善眞澄「宋朝訳経始末攷」(『関西大学』文学論集』三六  
一・二・三・四上 創立百周年記念特輯、一九八六年)

(2) 原美和子『参天台五臺山記』にみえる寒山説話について(『学  
習院史学』三一、一九九四年)

(3) 石井正敏「成尋生没年考」(『中央大学文学部』紀要』一七七、  
一九九九年)

(4) 原美和子「成尋の入宋と源隆国の説話集編纂」(『アジア遊学』三  
七 特集：マルコ・ポーロの仲間たち、勉誠出版、二〇〇二年)

(5) 遠藤隆俊「宋代中国のパスポート 日本僧成尋の巡礼」  
『史学研究』一三七、二〇〇二年)

(6) 藤善眞澄「宋朝の賓礼 成尋の朝見をめぐって」(『関西大  
学東西学術研究所紀要』36、二〇〇三年)

(7) 森公章「入宋僧成尋とその国際認識」(『白山史学』三九、二〇〇  
三年)

(8) 森公章「参天台五臺山記」の研究と古代の土佐国 入唐・宋  
僧の弟子の視点から」(『海南史学』四一、二〇〇三年)

次に、拙稿の誤りについて、幾つか訂正しておきたい。

一〇七二年四月二十九日(巻一)及び、一〇七三年五月二十六日(巻  
八)の「通事」を陳詠としたのは、筆者の不用意なミスで、施十郎が正  
しい(表C 成尋の金銭出納 該当箇所参照)。このため、陳詠の齋銭  
収入は、杭州興教寺・靈隱寺の各一〇〇文を差引き、一五〇〇文となる  
(一四九頁下段)。

五台山巡礼行における馬鋪供出の担夫について、関連記事の取り纏め  
に誤記があった。十一月十四日・二十六日・十二月五日・九日・二十六  
日(巻五)が正しい(一四七頁上段)。十二月五日は十一名、他は全て十  
名であった。なお、弟子僧五名が明州へ向け出立した際には、使臣を加  
えた一行六名に対し、兵士十人・馬鋪六人・担夫六人が帯同した模様で  
ある(一〇七三年二月八日 巻六)。

この他、特に銅銭の出納金額に関しては、解釈を留保した点が少なく  
ない。例えば、陳詠得度の際、尚書祠部書生官人に支払った一貫文だが  
(一〇七三年四月十二日 巻八)、もし成尋が半額の五〇〇文を負担した

のであれば、全体集計も総支出一九八・一貫文、黒字一三八・九四九貫文と改めなければならぬ。

なお、前掲⑤遠藤論文には、一〇七二年八月一日(卷三)の「省陌」計算に関し、筆者と異なる見解が示されているが(八三頁註18)、原文「素」は、貫索・素繩の意で、「貫」と全く同義であり、閏七月十六日の用例から見ても従い難い。又、⑥藤善論文には、「院書生・司家」に関し、伝法院庶務に相当する「院司家」には、司家(事務方)と書生(書手)がいて、両者は別物であると指摘されている(六頁)。成尋の記述は、大筋において、一〇七二年十月二十四日(卷四)を境に院書生から司家になり、両者を同一視するものであるが、実際の所、都合十二回、三人揃つての登場になる彼らは(一〇七二年十月十九日にも、書生上級者一名 永和か? がやって来て、成尋申状・伝法院牒を、三人共に向いて客省司に渡したと告げている)、確証は無いものの、同じ顔触れであった可能性が高いのではないか(後掲表C付載人名索引参照)。指摘を踏まえ、十月二十四日以降の司家も、その実体は書手であると取るべきかと思つたが、後者を俟ちたい。

慈済大師智孜(一〇七二年十月十四日初出 初の実見は十月二十六日)は、「智敬・智教・智放」等に作るが、前注の①藤善論文、四一二頁に拠つて訂正。孔文仲(台州推官秘書?)、一〇七二年五月二十八日)は、王麗萍『宋代中日交流史研究』(勉誠出版、二〇〇二年)、一五一頁の指摘に拠る。知州の検出には、李之亮『宋代郡守通考』シリーズ全十冊(巴蜀書社、二〇〇二年)が便利であり、官職全般には、梅原郁『宋代官僚制度研究』(同朋舎出版、一九八五年)が必読である。

藤善眞澄「成尋をめぐる宋人」『参天台五臺山記劄記』二の二、法党の影」(『関西大学東西学術研究所紀要』31、一九九八年)、二二二―二五頁を参照。

李國玲編著『宋僧録』上・下冊(綾装書局、二〇〇一年)に拠れば、この一〇九名のうち、処威教主(卷二)、宝覺大師務周・慧礼僧正(卷三)、宣梵大師日称・梵才大師慧詢(卷四)、妙済大師延一(卷五)、明義大師清衍(卷六)、智悟大師懷謹(卷七)、慈覚大師雲知・海月大師惠弁(卷八)の十名が検出し得る。短期間の滞在中にこれ程各地の高僧が網羅さ

れていることに、成尋の情報量の傑出ぶりが窺われよう。なお、本書には六千一百余人の宋僧が収録されているが、齋然は見えても、成尋・快宗は検出出来ない。

円仁の宿泊については、Edwin O. Reischauer, *Emin's Travels in Tang China*, New York, 1955. (田村完善訳『円仁 唐代中国への旅』講談社学術文庫、一九九九年収録) V(pp.143-49). *Food and Lodging on the Road* 及び、小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第四卷(鈴木学術財団、一九六九年)四三一―三七頁を参照。

前掲拙稿、一五二頁、注を参照。

藤善眞澄「成尋をめぐる宋人」『参天台五臺山記劄記』二の二、成尋と蘇東坡」(『関西大学東西学術研究所紀要』26、一九九三年)、一〇―一頁を参照。なお、淮南転運司も、文書で登場する(一〇七二年閏七月七日・八月一日 卷二・三)。

『宋史』卷三三二、劉庠伝及び、呂陶『浄徳集』卷二「枢密劉公墓誌銘」。

『続資治通鑑長編』卷二二五、神宗・熙寧四年七月甲辰条。前注 所掲李之亮書、『宋河北河東大都守臣易替考』、二八三頁を参照。

前注「枢密劉公墓誌銘」には、「妣李氏、生顯家、有賢行。治家教子、如古烈婦、以公貴、累封某郡太君」と見える。

『続資治通鑑長編』卷二五六、神宗・熙寧七年九月戊戌条、「知太原府・竜岡閣直学士・起居舎人劉庠、為礼部郎中、再任。庠尋以母喪去。」

藤善眞澄「成尋の齋した彼我の典籍」『日中文化交流の一齣』、『仏教史学研究』二二二―二二四、一九八一年、三八頁を参照。

荒木敏一『宋代科挙制度研究』(同朋舎、一九六九年)、近藤一成『王安石の科挙改革をめぐる』(『東洋史研究』四六 三、一九八七年)、平田茂樹『宋代銓選制度の一考察』王安石の改革を中心に」(『歴史』六九、一九八七年)等を参照。

『宋会要輯稿』選舉一 二二(貢挙)・七 二二(親試)。

前注 所掲荒木書、三八一頁以下(第六章：北宋末南宋初期の科場と仏教)を参照。

(本学非常勤講師)

表B 両『日記』の人的構成

## 円 仁

構 成		vol.1	vol.2	vol.3	vol.4	
唐	僧	43	41	31	32	147
	官	83	71	15	43	212
	俗	10	56	12	1	79
新 羅		6(僧1)	37(僧30)	20(僧19)	59(僧37)	122(僧87)
日 本		48(僧7)	5(僧2)	1(僧1)	11(僧8)	65(僧18)
		190	210	79	146	625

## 成 尋

構 成		vol.1	vol.2	vol.3	vol.4	vol.5	vol.6	vol.7	vol.8	
宋	僧	49	60	65	32	84	91	52	35	468
	官	46	22	230	52	841	49	59	96	1,395
	俗	65	15	32	5	18	3	14	25	177
日 本		14(僧14)								14(僧14)
		174	97	327	89	943	143	125	156	2,054



	清衍(明義大師)	1072 / 10.14	1073 / 2.22·25
	文正	1072 / 10.14	1073 / 2.22·25
	円則(座主)	1073 / 2.24·26	3.12·13·19·27 4.1·3·7·9
vol.7	行事大保	1073 / 3.2·3·4·5·6·7(閻張)·8·9(張)·10(張)·11(閻)·13(張)	
	洪且(華藏大師)	1073 / 3.2·3·7·8·9·10·11·24	4.6
	守恩(慈照大師)	1073 / 3.2·3·8·9·10·11·12·24	4.6
	善湊	1073 / 2.12·14	3.2·7·8·9·10·11
	智普	1073 / 3.2·8·10·11	
	文秀	1073 / 3.2·8·9·10·11	
	之(文)弁	1073 / 3.2·8·9·10·11·24	4.4?
	惠淨	1073 / 3.2·8·9·10·11·24	4.4?
	令喜	1073 / 3.2·8·9·10·11	4.4?
	自然	1073 / 3.2·8·10·11	
	清彦	1073 / 3.2·8·10·11	
	雲秀	1073 / 3.2·8·11	
	省賢	1073 / 3.2·8·11	
	道林	1073 / 3.2·8·11	
	処祥	1073 / 3.2·8·11	
	永定	1073 / 3.2·8·11	
	法顯	1073 / 3.2·8·11	
	淨橋	1073 / 3.2·8·11	
	惠慶	1073 / 3.2·8·11	
	智來	1073 / 3.2·8·11	
	惟秀	1073 / 3.2·8·11	
	惠毗	1073 / 3.2·8·11	
	官勾行事	1073 / 3.7·8(馮供奉)·9(楊供奉)·11(楊供奉等3人)	
	張行者	1073 / 1.25? 3.13·15·23? 4.10·13·25 5.12·30 6.1	
	懷謹(智悟大師)	1073 / 3.16·24·25	4.3·6
	惠道(講律)	1073 / 2.17 3.20·29(惠通)	4.11·14
	劉政(左班殿直)	1073 / 3.18·23·25·26 4.2?·9·13·15·16·23·25 5.5·8·18·22·26 6.1·2·3·4·6·11	
	德嵩(三藏大師)	1073 / 3.25·27 4.9·13·14·15·16·18 5.8·18·26·28 6.1	
vol.8	王中正(御帶 帶御器械)	1073 / 4.1·2·5	
	師遠(梵惠大師)	1072 / 10.14	1073 / 4.5
	法仁(妙空大師)	1073 / 4.1·6	
	劉錕(都綱)	1073 / 5.21·24·27·28·30	
	李詮(船頭)	1073 / 5.21·26·27	
	蘇軾(通判學士)	1072 / 6.5	1073 / 5.22
	劉直?(通判郎中)	1072 / 6.5	1073 / 5.22
	雲知(慈覺大師)	1073 / 5.26·28	
	惠弁(海月大師)	1073 / 5.26·27·28	
	孫吉	1073 / 6.11·12	

- 1073 / 1.1・2・3・6・7・10・13・15・17・18・20・23・28・30 2.6・10・11・14・19・21・23・24・25・26・27・28・29 3.1・12・15・17・18・19・23・25・27・29 4.1・2・4・5・7・8・11・12・13・14・19
- 可道(小典座) 1072 / 10.14・18・25・30 1073 / 1.1・6・7・9・13・25・27 2.28 3.14・17・18・22 4.7
- 院書生(司家) 1072 / 10.15・16・17・18(3人)・19・21・22(3人)・24(3人)・25・28(永和) 12.27(3人)・28(3人)
- 1073 / 1.8(3人)・13・16(永和等2人)・21(3人)・26(3人)・27(3人) 2.1・28(永和)・29(3人) 3.22(3人)・23(3人)・24
- 智普(文慧大師) 1072 / 10.14・16・17・19・20・21・23・25・26・27・30 12.28・30
- 1073 / 1.1・10・11・29・30 2.11・15・17・18・19・21・22・24・25・29 3.1・13・14・15・16・22・25・27 4.1・19
- 客省司官人 1072 / 10.17・21・22 11.1 12.28・29・30
- 1073 / 1.2(孫宣戒)・8(孫宣戒等3人)・10(2人)・11・12・22(孫宣戒)・25(孫宣戒)・27(下部3人, 孫宣戒等3人)・29 3.18(孫宣戒)・26・27(孫宣戒)・28・29・30 4.1(孫宣戒)・2(3人)
- 法瑩(澄鑿大師) 1072 / 10.18 1073 / 1.2
- 用寧(文鑿大師) 1072 / 10.14・18 1073 / 2.15・22・25・27 3.2・7・8・9・10・11・22・28
- 聖主(神宗皇帝) 1072 / 閏7.5・6・7・10・12・13 8.28 10.11・13・15・20・21・22・23・24・29 12.28
- 1073 / 1.13・18・25 3.2・3・4・5・6・7・8・11・15・28・30 4.2・4・19 5.11 6.12
- 惠琢(広智大師) 1072 / 10.14・25・27・29・30 1073 / 1.1 4.5
- 智孜(慈濟大師) 1072 / 10.14・26・29・30 12.28 1073 / 1.1・14・15・27 2.1・15・22・25 3.1・15・23 4.14
- 劉鐸(右班殿直) 1072 / 10.26・27・29 11.1・3・4・8・10・20・23・25・28・29 12.1・4・5・7・10・11・17・20・25・26・30
- 1073 / 1.5
- 明遠(崇梵大師) 1072 / 10.14・30 1073 / 1.1・15・26 2.1・22・25 3.1・15 4.4・8・14
- vol.5 劉庠(知府竜図) 1072 / 11.20・21 12.9・10・11 1073 / 1.20
- 省順(都維那) 1072 / 11.28・29 12.1・2
- 承鐸(覚恵大師) 1072 / 11.28・29 12.1・2 1073 / 3.13・18 4.6
- 順行(覚証大師) 1072 / 11.27・28・29 12.1
- 省広 1072 / 11.29 12.1
- 延一(妙濟大師) 1072 / 11.29 12.1
- 温琦(表白) 1072 / 11.29 12.1
- 省岳 1072 / 11.29 12.1
- 省認(知客) 1072 / 12.1・2
- 王上官(監酒) 1072 / 12.1・2
- 温志(知客) 1072 / 12.2・3
- 温仁(行者) 1072 / 12.2・26 1073 / 1.5
- 天吉祥 1072 / 10.14 12.27・28 1073 / 1.1・4・7・10・14・15・16・17・18・19・22・26・27 2.1・2・5・7・
- (広梵・梵義 名 大師) 15・16・18・20・22・25・27 3.1・15・16・17・24・28・30 4.8・14
- 中天竺僧 2人(恵遠・恵寂) 1072 / 12.27・28・29 1073 / 1.1・2・8・18(恵遠)・22・30? 2.2? 3.1・7・17?・24・30
- 大天国僧 2人(吉祥子・衆護) 1072 / 12.27・28・29 1073 / 1.1・2・4(1人)・7・9(吉祥子)・10(吉祥子)・13(吉祥子)・15(吉祥子)・17(吉祥子)・19(吉祥子)・22・27(吉祥子)・30? 3.1・24・30 4.8
- vol.6 恵海(宗梵大師) 1072 / 10.14 1073 / 1.9
- 陳遂礼(御薬) 1073 / 1.13・20?・21・26?・29・30 2.2 3.2・8(承礼?)・14・18・23・28・30 4.1・2・4・5・14
- 法貴(妙因大師) 1073 / 1.22 3.16・24
- 子(人)恵 1073 / 1.21・22 3.24
- 道晃(老典座) 1072 / 10.13?・14 1073 / 1.1・15・27 3.14・17・22 4.7・13
- 王宗彦(三班使臣) 1073 / 1.25・26・29 2.2・8 5.7
- 張士良(供奉) 1073 / 2.1・18 3.28
- 王珪 1073 / 2.9 4.4
- 馮京 1073 / 2.9・25・27・28 4.4
- 吳充(枢密) 1073 / 2.9 3.20・21
- 蔡挺(諫議) 1073 / 2.3・4・9
- 文素(澄鑿大師) 1072 / 10.14 1073 / 2.22・25・27
- 智宝(清楚大師) 1072 / 10.14 1073 / 2.22 3.28 4.8
- 顕静(宣密大師) 1072 / 10.14 1073 / 2.22・25
- 清振(慈雲大師) 1072 / 10.14 1073 / 2.22・25
- 可熙(宝恵大師) 1072 / 10.14 1073 / 2.22・25

- 禹珪(小師) 1072 / 5.14·22·25·26 6.2·9·11·15 閏7.13·15  
 鴻植(教主) 1072 / 5.15·21·24·25 6.8·11·14 7.10 閏7.6·11  
 印成(闇梨) 1072 / 5.18·19·23  
 良玉 1072 / 5.21·22·25 6.5·13 7.3·13  
 惟照(闇梨) 1072 / 5.23 6.5 閏7.6  
 日宣(闇梨) 1072 / 5.23 6.11·12·13 閏7.4·6  
 中式(闇梨) 1072 / 5.25 6.25  
 道新 1072 / 5.25 6.7·29  
 元吉(表白?) 1072 / 5.25·27? 閏7.5?  
 禹昌(行者) 1072 / 5.25 6.11  
 錢暄(知州少卿) 1072 / 5.28 6.3·5·9·11·15 閏7.2·7·12·13·16·22·23 8.1·2·3·4  
 安保衡(通判郎中) 1072 / 5.28 6.1·5·11·15 閏7.6·7·22·23 8.1  
 孔文仲?(推官秘書) 1072 / 5.28 6.5 閏7.7 8.1  
 覺希 1072 / 5.29 6.1·15 閏7.13  
 若明(教主) 1072 / 5.29 閏7.18  
 子章(覺照大師) 1072 / 5.29 6.1·4 閏7.13  
 子鴻(長老) 1072 / 5.29 6.1  
 vol.2 智海(表白) 1072 / 6.5 7.8·18·19·20·21·22 8.6  
 鴻実(庫主) 1072 / 6.6·26 7.20  
 双頂(童行) 1072 / 6.7·26 7.15·19  
 拈賢 1072 / 5.25? 6.8·16·21 閏7.24  
 如日(文章) 1072 / 6.8·10·12·22 7.26 閏7.5 1073 / 4.5  
 中礼(座主) 1072 / 6.19·23·25  
 処咸(教主) 1072 / 4.30 5.3 7.21·29·30 閏7.10  
 如貫(闇梨) 1072 / 7.27 閏7.11  
 潘大保(松門巡檢) 1072 / 閏7.12·14  
 景掌(白蓮院) 1072 / 閏7.16?·20  
 陳敷(俗人) 1072 / 閏7.21·22·23  
 除(徐)八(家主) 1072 / 閏7.23 8.1  
 小馬(人力?) 1072 / 閏7.24·27  
 劉仁衡(稅務權推官) 1072 / 閏7.29 8.1  
 vol.3 鄭珍(崇班 兵馬都監) 1072 / 閏7.7·12·22 8.1·5·8·9·10·11·13·14·16·18·19·22·23·27 9.4·7·10·12·22·25  
 10.1·7·8·9·11·12·13·18  
 陳照寧(都衛) 1072 / 8.3·15·21 9.6·7·10 10.1·9·11  
 智深(長老) 1072 / 8.8·9  
 法如(慈照大師) 1072 / 9.4·5  
 巖君貺(通判) 1072 / 9.4·5  
 王瑜(職員) 1072 / 9.7·8  
 務周(寶覺大師) 1072 / 9.10 1073 / 5.8  
 慧礼(僧正) 1072 / 9.13 1073 / 5.4  
 惟雅(副僧正) 1072 / 9.13 1073 / 5.4  
 道演 1072 / 9.13 1073 / 5.4  
 屑福(梢工) 1072 / 9.25 10.6·11·12  
 vol.4 慧賢(宣秘大師 少卿) 1072 / 10.13·14·15·16·17·18·23·29·30 11.1 12.28  
 1073 / 1.1·14·19·20·22·27·29·30 2.22·25 3.1·14·15·24·28·30 4.1·3·4·8·14 5.11  
 李舜拳(御藥) 1072 / 10.12?·13·14·15·16·17·18·22·24·27·29 12.30  
 1073 / 1.13(他出)·21(他出) 2.25  
 日称(宣梵大師 大卿) 1072 / 10.13·14·15·18·19 12.28  
 1073 / 1.1·20·22·27 2.22·25 3.7·15·16·17·18·24·28·30 4.8·14  
 慧詢(梵才大師 三藏) 1072 / 10.14·15·16·17·18·19·20·22·23·24·25·26·27·28·29·30 11.1 12.26·27·28·29·30  
 1073 / 1.1·3·5·8·10·11·13·14·16·17·18·20·21·22·23·25·26·27·28·30 2.1·6·7·10·11·  
 13·14·15·16·17·18·19·20·22·23·25·26·28·29 3.1·12·13·14·15·17·18·20·21·23·  
 24·25·26·27·28·29·30 4.1·3·4·5·6·7·8·9·12·13·14·16 5.11  
 定照(筆受) 1072 / 10.14·16·17·18·19·20·25·27·30 12.28·30

vol. 8	1073. 6. 4	越 州 上虞県 明 州	学士(知州謝景温?)
	6. 6		堰司 兵士7人
	6.10		学士(知州李縉?) 使者(知州)
	6.11		通判
	6.12		孫吉

vol.1	曾聚(十郎)	1072 / 3.15 4.3・15・22 6.5	1073 / 1.23
	吳鏘(十郎)	1072 / 3.15 4.21・22 5.1・3	
	頼縁(供奉)	1072 / 3.15 4.18・19・21・22・28・29 5.11・13・14・18・21 6.5・7・9・11 7.5・8・19・26 閏7.3・7・10・28・29 8.1・6・14・27 10.13・15・18・20・21・22・23・28・29・30 11.1・12・20・21・27 12.1・10・20・28	
	快宗(供奉)	1072 / 3.15 4.18・20・21・22・28・29 5.3・14・18・19・21 6.5・7・9・11 7.5・8・19・26 閏7.3・7・10・28・29 8.1・6・14・27 9.5 10.13・15・18・20・21・22・23・28・29・30 11.1・12・20・21・27 12.1・10・20・28	
	聖秀	1072 / 3.15・19・20・22 4.18・19・20?・21・22・28・29 5.14・18・19・21 6.5・7・9 7.19 閏7.3・7・10・28・29 8.1・27 9.5 10.13・15・18・20・21・22・23・28・29・30 11.1・12・20・27 12.1・10・20・28	
	惟観	1072 / 3.15 4.20・21・22・23・28・29・30 5.14・15・18・19・21 6.5・7・9 7.7・19・27 閏7.3・7・10・16・23・28・29 8.1・3・5・27 10.11・13・15・18・20・21・22・23・28・29・30 11.1・12・20・27 12.1・10・20・28	
	心賢	1072 / 3.15・19・20・22 4.20?・21・22・23・28・29 5.13・14・18・19・21 6.5・7・9 7.19 閏7.3・7・10・28・29 8.1・27 9.5 10.13・15・18・20・21・22・23・28・29・30 11.1・12・20・27 12.1・10・20・28	
	善久	1072 / 3.15 4.20?・21・22・23・28・29 5.14・18・19・21・23 6.5・6・7・9 7.7・19 閏7.3・7・10・23・28・29 8.1・3・27 10.13・15・18・20・21・22・23・28・29・30 11.1・12・20・27 12.1・10・20・28	
	長命(明)	1072 / 3.15・19・20・22 4.20?・21・22・28・29 5.2・14・18・21・23 6.5・6・7・9 7.19 閏7.3・7・10・23・28・29 8.1・27 10.13・15・18・20・21・22・23・28・29・30 11.1・12・20・27 12.1・10・20・28	
	永智(一乗房)	1072 / 3.15 1073 / 5.21・26・27	
	林臯(甘郎)	1072 / 3.22 4.12・15・22	
	陳從(梢工)	1072 / 4.12・15	
	李思愷	1072 / 4.15・22?	
	張實(三郎)	1072 / 4.17・18・19・21・22・26 5.1・3 6.5	
	陳詠(一郎)	1072 / 4.19・21・23・26・30 5.2・3・4・5・6・15・18・19・20・26・28 6.5・6・7・8・9 閏7.7 8.1・5・15・22・23・27 9.4・5・6・10・17・21・22 10.1・9・11・13・16・18・21・22・23・27・29・30 11.1・12・19・20・12.1・5・7・9・10・17・20・26・27・28・30	
	施十郎	1072 / 4.22・29 1073 / 5.24・26・30 6.10	
	沈立(都督)	1072 / 4.14・15・22・26 5.1 6.5 8.22・23	
	達観(禪師)	1072 / 4.29 5.1	
	允初	1072 / 4.30 5.3	
	張九郎(家主)	1072 / 5.10・11	
	仲芳(寺主)	1072 / 5.13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26 6.4・5・7・8・9・10・15・18・20・26・27 7.10・14・27・30 閏7.4・6・7・8・10・11・17・18・19・24・25・28 8.5・6	
	利宣(副寺主)	1072 / 5.13・14・15・23 6.5・7・8・9・27 閏7.11? 8.6	
	仲文(監寺)	1072 / 5.13・14・15・23 6.5・7・8・9・27 7.25・27	

vol. 7	3. 9 3.11 3.12 3.13 3.14 3.15 3.16 3.17 3.20 3.21 3.23 3.24 3.25 3.27 3.28 3.29 3.30	開 封	<p>剃頭人 守護人(人数不明) 使者(張大保) 楊供奉  門戸雑文(夫) 苑子(人数不明) 運食男 茶湯男 幕曳男 仏供備男 苑子長 仏供男 兵士1人  守門人? 担夫2人 恩賜茶菓将来人 東華門外店家 担夫5人 老行者  馬人 張行者(梵才三蔵) 恵明(大相国寺東経蔵院)・褐衣1人  商人(木香花) 万歳院講律鐸和尚 使者?  僧(寿昌寺)  智悟大師懐謹(顯聖寺院主) 司家官人 馬人 侍者2人・使者行者(妙因大師法貴)  重智(定州の僧 唯識宗) 行者(梵才三蔵)  恵道和尚(万歳院講律) 僧・老俗2人 使者(吳枢密 吳充)  侍人数多・女房たち(吳家) 馬人2人  使者(大相国寺仏牙院) 使臣劉政(左班殿直) 宝乘和尚(尉氏県興国寺某院院主)  商人(芍薬花) 行者画工(定照大師)  馬人 院主3人(他院)・俗人4人・老和尚80余歳(他寺)・院主尼2人(他寺)  三蔵大師徳嵩(大相国寺) 浴室人  胡伝(越州新司理参軍)  李供奉(使臣) 証義1人(下座) 張供奉  律師(万歳院)  老道士1人 西蕃人8人・下屬10人</p>
vol. 8	4. 1 4. 2 4. 3 4. 4 4. 5 4. 6 4. 7 4. 8 4.11 4.12 4.13 4.14 4.15 4.24 4.26 5. 2 5. 4 5. 7 5. 8 5. 9 5.11 5.14 5.18 5.21 5.22 5.24 5.26 5.27 5.28 6. 1 6. 2		<p>王御帯(作坊使・文州刺史王中正) 西蕃人20余人 使者行者(妙空大師法仁 寿聖院院主)  馬人 数百~千人(崇政殿南庭) 舍人1人 祇候庫庫子3人 広照大師(大相国寺)  小師池等(院少卿) 僧(名不明)  使者官人2人(善慧大師号)  梵恵大師師遠 供奉官  妙空大師法仁(寿聖院院主) 僧約200人 一小男三蔵 馬人  李忠臣(前沢州司戸参軍 円則座主の兄弟) 使者(宣教大師智夾 大乘戒壇院院主)  使者(梵才三蔵) 浴室人  天台行者(1.14 国清寺行者の1人?)  使者(万歳院講律恵道)  賜紫大師(他寺) 尚書省祠部書生官人 恵隠(大相国寺東経蔵戒律院)  担夫8人・官人4人・行者2人・印経院職掌(新経到来) 担兵士7人・雇夫1人(船載) 馬人? 儀鸞(下部 房装束人) 季行者(給仕)  行者(大卿) 王太尉(曹侂?)・若官1人 侍者(御薬) 浴室人  梢工・水手・梢工作 官人(臨検) 揚州?秀才  楚 州 僧2人(金山寺)  韓守承・朱判官(杭州監軍資庫)  揚 州 使者(知州)  兵士4(5?)人(轎担) 知州給事中(王居卿) 頭子院院主・寺主(開元寺) 行者・寺僧(寿寧寺)  潤 州 堰兵士7人 梢工 本兵士10人 使者(知州) 知州大卿(陳経) 永励(陳船頭舎弟)  僧4人・俗2人(使者 金山寺主宝覚大師務周) 張寧(監潤州商税)  丹陽県 兵士10人  常 州 通判郎中 使者3人(通判) 商人(竹轎) 温大師(常州太平興国寺)  蘇 州 王司勳(今年新任の刺史 知州王誨) 水手 浴室主 店家(和布購入)  秀 州 郎中(知州吳司文?) 使者(郎中・茶酒司)  杭 州 船頭6人(劉錕・李詮等) 転運司官人 知州舎人(陳襄)  通判学士(蘇軾) 通判郎中(劉直?)  海人(劉錕船)  慈覚大師雲知(靈隠寺寺主) 海月大師恵弁(管内僧正)  使者(天竺寺僧正 慧弁)  善妙大師  大卿(知舒州 石牧之)  使者(大卿)</p>

vol.5	1072.12.24 12.25 12.26 12.27 12.30	鄭州 開封	供奉官(奉寧駅宿) 店家 商人(柴) 鄭州兵士20人 看門官人(順天門) 順天門馬鋪10人 広梵大師天吉祥三蔵 中天竺僧2人(惠遠・惠寂) 大天(丈夫)国僧2人(吉祥子・衆護) 官人 商人(板8枚・方木5枚) 工人?
vol.6	1073.1.1 1.2 1.3 1.4 1.7 1.8 1.9 1.10 1.13 1.14 1.16 1.20 1.21 1.22 1.25 1.26 1.27 1.29 1.30 2.1 2.2 2.3 2.4 2.8 2.9 2.12 2.14 2.17 2.19 2.21 2.22 2.23 2.24 2.28 2.29		上官1人 梵学大師真梵(澄鑿大師法瑩 景德寺 小師) 戒月(蘇州雍熙寺) 僧7人(他寺) 賜紫僧2人(寺名不明) 高僧8人(他の諸寺) 高僧3人(他寺) 慈氏行興(景德寺僧 大聖院主) 宗梵大師惠海(大相国寺) 賜紫大師等8人(他寺) 僧15人(他寺) 行者 馬主 焼使供奉 供奉官人騎馬数千(御輿前陣) 兵士・官人無数 使臣(中使) 行者2人(国清寺) 繼蔵(金山寺) 入内内侍省供奉官 使者(行者 子惠) 陳遂礼(陳御薬) 馬人 賜紫尼(妙因大師法貴 崇徳院院主) 賜紫尼(子惠 衡慶院院主) 齋行事賜紫僧 知事僧 尼衆・俗人たち 行者(梵才三蔵) 雄馘(景德寺慈氏大聖院・天台山大慈寺普賢懺堂) 景福(小師) 供奉官 房装束下部1人 道晃(老典座) 行者3人 使臣(三班使臣王宗彦 5人帰国) 行者(定照大師) 使臣(中使 供奉官張士良) 使者(受領表) 大天(丈夫)国僧2人(10年滞在) 使者(蔡諫議 蔡挺) 馬人 兵士4人(菓子精進物大一荷運搬) 4人(四大瓶酒) 1人(菓子一蓋) 使者侍人 兵士10人・馬鋪6人・知鋪担人6人(5人出発) 文彦博(枢密使)・王珪(参知政事)・馮京(同)・吳充(枢密副使)・蔡挺(同) 使者?(善湊) 浴堂人 持律僧2人(万歳院講律惠道・宗泰・徳珠3人の使者) 汪鎮(明州秀才及第人) 行者(文慧大師) 澄鑿大師文素(綴文) 清梵大師智宝(筆受) 宣密大師顯静・慈雲大師清振・宝恵大師可熙・明義大師清衍・文正等(証義) 使者(太平興国寺戒壇院) 使者(成尋) 円則座主(大相国寺東経蔵戒律院) 使者(成尋) 沙弥30余人 和尚(戒壇院院主) 紫衣僧7人
vol.7	3.1 3.2 3.6 3.7 3.8		使者行者(崇福院講經賜紫尼惠饒) 有孚(大相国寺) 供奉官(中使 祈雨) 使者(後苑司) 使者(後苑司 兵士) 馬人 守門人(人数不明) 行事大保1人・供奉官1人 華蔵大師洪且(大相国寺)・慈照大師守恩(万歳院)・善湊(三学護国院)・智普(顯聖寺)・文秀(開宝寺)・之弁(大相国寺)・惠浄(等覺寺)・令喜(報恩寺)・自然(大相国寺)・清彦(実相禅院)・雲秀(大相国寺)・省賢(清天寺)・道林・処祥・永定・法顯・浄橋・惠慶・智来・惟秀・惠玘(大相国寺 9名) 乳母・子(行事大保) 少卿行事(8日陳承礼?) 衣冠の人々 官勾行事 閻大保 張大保 小行事司家(11日3人) 馮供奉

vol.4	1072.10.23	開封	使臣(入内内侍省内侍殿供奉官) 維那・住僧約150人・寺司4人・監寺・賜紫(啓聖禪院) 使者(使臣) 馬人 開宝寺僧(能書) 広智大師惠琢 惠裳(普安禪院) 僧俗数百人(太平興国寺浴院) 慈濟大師智孜 遊台使臣(右班殿直劉鐸) 劉瑾(太常博士) 勅使侍中・使臣官人(日本装束進覽) 商人(馬2疋) 崇梵大師明遠 関鎖
vol.5	11.1		三司官人 京兵士20人 院主(永福院)
	11.2	中牟県	勅使侍中
	11.3	鄭州	靈顯王廟店家 鄭州兵士20人
	11.4		商人(白米) 兄弟等(使臣)
	11.5	滎陽県	商人(馬2疋) 乞匈人多数 滎陽県兵士20人
	11.6	汜水県	兵士数十人(行慶関) 鞏県兵士20人
	11.7	孟州	孟州兵士20人
	11.8	懷州	童・女 懷州兵士20人
	11.10	沢州	沢州兵士20人
	11.12	潞州	知州少卿(向伝范)・都監大保
	11.13		寺主・道俗男女数千(開元寺) 潞州兵士20人 寺主老僧(資慶寺)
	11.14		行者1人(資慶寺) 担夫10人(孝義馬鋪) 馬夫(呈寺馬鋪)
	11.15	威勝軍	道俗男女約百人・講師・女一人・寺主(広教禪院) 威勝軍兵士20人
	11.19	太原	行事侍1人(平晋駅)
	11.20		知府竜図(劉庠) 客人4人 老女3人
	11.21		府使者4人(前日より合計) 紫衣僧 太原兵士20人
	11.22	忻州	司官西頭供奉官 百井寨兵士20人 石嶺関兵士20人 供奉官
	11.23	忻口寨	忻州兵士20人 州使者?(忻州少卿)
	11.24	崞県	忻口寨兵士20人 寨主 県官人2人 崞県兵士20人
	11.25	代州	知州大卿(李綬) 代州兵士35人
	11.26	繁峙県	馬夫10人(門前馬鋪 担人) 店家 繁峙県兵士35人
	11.27	宝興軍	宝興軍兵士35人 行者7人(出迎え)
	11.28	五台山	都維那省順・副僧正覚恵大師承鑑・寺主覚証大師順行・打鉢僧8人(諸僧数百人 真容院)
	11.29		副寺主・知六師太閣省広・妙濟大師延一・表白兼講主温琦 上卿(雁門郡配流人) 省岳(知菩薩殿)
	12.1		僧疑和尚(無言常座20年) 省認(知客) 寺主崇暉(太平興国寺 白鹿寺) 西天竺三蔵(大花嚴寺僧房) 上官・次司 油泊祥?(五台県知県) 王上官(雁門県監酒) 趙温翰(行者)
	12.2	宝興軍	行者40人 黄炎(雁門令) 温志(知客) 宝興軍軍主 宝興軍兵士35人(翌日帰還の際は40人) 知客 温仁(行者)
	12.3	繁峙県	店家 知県 繁峙県兵士35人
	12.4	代州	家主(店家) 代州兵士20人 官人等多数 州使者2人?(知州大卿)
	12.5	崞県	州使者3人(代州大卿) 官人2人(竜泉馬鋪) 馬鋪担人11人 馬鋪1人 知県・少府・監酒の3人
	12.6	忻口寨	崞県兵士20人 忻口寨兵士20人
	12.7	忻州	忻州兵士20人 寺主紹立(建国寺) 州使者?(忻州少卿)
	12.8	百井寨	石嶺関兵士20人 関司 巡檢使(百井駅宿) 百井寨兵士20人
	12.9	太原	担人10人 馬鋪兵士3人(楊曲馬鋪) 府使者2人?(知府)
	12.10		太原兵士20人 放生人2人 府使者3人?(知府)
	12.11		府使者4人?(知府)
	12.15	威勝軍	威勝軍兵士20人
	12.17	潞州	笠持等6人・官人?(知州派遣の出迎え人) 州使者?(知州) 潞州兵士20人
	12.19	高平県	県使者?
	12.20	沢州	州使者2人? 沢州兵士20人
	12.21	懷州	懷州兵士20人
	12.23	孟州	妻子眷属(州官人死者の棺 河陽南駅)

vol.3	1072. 8. 7	新昌県	知県・少府 県使者 寺主(宝巖寺)
	8. 8	剡 県	人力12人(新昌県 輜担・人夫 ) 知県 智深長老(実性院院主) 県官 3人 台州兵士 4人?
	8. 9		人力20人(剡県 船載人夫 ) 希顔(惠安都寺寺主)
	8.12	越 州	転運使 越州官人たち
	8.13		秀才(使臣崇班の子) 州使者?
	8.14		寺主闇梨(景德寺) 客僧(大師) 輜担 6人?
	8.16		知州(孔延之) 台州兵士 4人(17日返遣)?
	8.22	杭 州	転運司官人 4人 提拳(市舶司?)
	8.23		小使(転運使派遣の使者?: 8.27・10.13後出) 推官・左蔵都監
	8.24		兵士 4人(26日 2人返遣・27日 2人を送る)
	8.25	塩官県	知県
	8.27	秀 州	知州少卿(周邠?)・通判 州使者 州使臣(司理参軍監康)
	8.28		諸僧(兜率院) 広教大師用和 願従(寿聖院)
	8.29		州使者
	9. 1		三樹堰官人 州使者? 秀州兵士 2人(返遣)
	9. 3	吳江県	王守和(蘇州使者)
	9. 4	蘇 州	文照大師善顯(広化院住持)・慈照大師法如(報恩寺) 輜担 4人? 寺主道隆・宗雅・誉昇・処参・法淵・道月等100余人(開元寺) 蘇州兵士10人 知州(唐詔)・官人 3人・転運司官人・通判(嚴君貺)・推官
	9. 5		蘇州兵士10人(4人輜担 前日の者と合わせ計18人?) 行者 寺主(普門院) 州使者
	9. 7	常 州	兵士(杭州?) 1人・梢工 1人・水手 3人 王瑜(常州使者) 懷雅・僧20人
	9. 8		兵士 8人(州使者) 兵士 7~8人(監酒使者)
	9.10	潤 州	通判・推官 宣教大師日華・白超(延慶寺)・慶蒙(普慈院)・応天(甘露院) 寺主大師(金山寺 宝覚大師務周) 知県(使者?) 船馬舎人
	9.11		堰司
	9.12	長 江	潤州兵士40人(2隻の牽引船)
	9.13	揚 州	慧礼・惟雅・道演・了素・玄実・守詢・积之・智潤・文清等17人 潤州兵士 5人(4人返遣) 李質(酒庫勾当人)
	9.14	邵伯鎮	伎楽数十人
	9.15	高郵軍	女人 3人(泣女) 僧 1人?
	9.17	楚 州	庄家 登州秀才(相人)
9.21	泗 州	州使者 2人 男細工 1人? 寺主(普照王寺)・寺主(乾明禅院) 典籍販売人	
9.22		短人(小人) 参詣人たち	
9.25	青陽駅	厩福(梢工)	
9.30	宿 州	州使者(知州 元居中?)	
10. 1	柳子駅	小手16人(酒 2瓶・糖餅 8枚分与)・梢工?人(酒 1提子・糖餅 5枚分与)	
10. 5	穀熟県	県官兵士10人	
10. 7	宋 州	象師 7人?	
10. 9	雍丘県	官人夫婦(使臣崇班の娘・智)・20余人(供の兵士等)	
vol. 4	10.11	開 封	使者(使臣崇班派遣) 内殿崇班 9人?(梢工・水夫)
	10.12		甥(内殿崇班) 官人(臨検) 侍中 1人
	10.13		使者(太平興国寺伝法院) 兵士14人(積荷運搬船) 院少卿(伝法院副寺主 宣秘大師慧賢三蔵) 勅使侍中御薬(李舜挙) 勾当僧 賜紫僧 院大卿(伝法院院主 宣梵大師日称三蔵)
	10.14		梵才大師慧詢三蔵 筆受定照大師 可道(小典座)
	10.15		院書生(18日 3人, 28日 永和)
	10.16		文慧大師智普
	10.17		官人(時絹15疋・紬10疋) 練物家 客省司官人(孫宣戒 1073. 1. 2 他 5人) 議者
	10.18		澄鑿大師法瑩(景德寺)・文鑿大師用寧(開宝寺)・神恵大師方諫(同)
	10.19		普正大師・広済大師 使者(浴室)
	10.20		僧 2人(温州鴈蕩山) 商人?(綿) 院孔目
	10.22		数千人 拜人 2人(赤衫) 聖主(神宗皇帝) 数百人(聖主の後左右に並列) 数十人(胡録を負う人) 数百人(御前に列立) 閤門祇候 勅使 勅使上卿 1人 馬人 使者(公家)



vol. 1	1072. 6. 2 6. 3 6. 4	台 州 天台山	司理秘校・主簿秘校 輜担6人? 学堂学頭 順敢・永明? 若者(能書) 州使者 州使者 老宿道士 国清寺庄房主老僧 人力7人
vol. 2	6. 5 6. 6 6. 7 6. 8 6. 10 6. 19 6. 22 6. 26 6. 27 6. 28 7. 1 7. 16 7. 18 7. 19 7. 20 7. 21 7. 23 7. 26 7. 27 7. 28 7. 29 7. 30 閏 7. 2 閏 7. 7 閏 7. 8 閏 7. 9 閏 7. 10 閏 7. 11 閏 7. 12 閏 7. 13 閏 7. 14 閏 7. 15 閏 7. 16 閏 7. 17 閏 7. 18 閏 7. 19 閏 7. 20 閏 7. 21 閏 7. 22 閏 7. 23 閏 7. 24 閏 7. 25 閏 7. 26 閏 7. 27 閏 7. 29	天台山 天台山 新坊庄 台 州 沙 潭 天台山	智海 守則(温州開元寺) 西山鴻実庫主 老僧(赤城寺) 本謙・葉之(美麗行者) 双頂(僧堂大炊男 童行) 扱賢 如日(字文章) 可明(惠光大師看經之院院主) 中礼座主・弟子 使者(如日) 童行(鴻実庫主) 紫子香 推官秘書(天台県: 5.26 杭州へ他出) 官人(臨海県) 道寧(童行) 老翁・少女(食堂) 徴上座 処規庫主 使者(童行徳) 客僧2人・俗人2人 法周(羅漢院院主) 明州推官 処咸教主(赤城寺) 輜担2人? 宗益(三賢院) 光梵(小師) 如貫閣梨(羅漢院) 中郃(檀主) 清祥座主 文皓庫主 使者(台州少卿の子)・老宿道士1人・老僧1人 祥吉座主 慎如 子阜 希鳳 了性 文瑤大師 潘大保(松門巡檢) 若者 弟子(子章) 僧官・象俵(景德寺) 道士老公 行者 鍛冶1人 白蓮院首座僧(景掌?)・処州備師 明州秀才4人・秀才(司理官の子) 司理官 惟果(普安禅院住持) 温州秀才7人 待使臣(知州) 僧6人(妙勝院) 姚孳(明州拳人 1076年進士?) 錢長・小周(国清寺輜担男) 北山普寧院住持閣梨 赤城寺僧 陳黻(俗人) 軫運司官人 除(徐)八家 州輜担2人・寺人力小馬 韶州客人僧 留守僧・行休大師 神戒 輜人2人 小閏? 劉仁衡(台州大理寺丞監城下稅務權推官)・冢太?(通鋪兵士)
vol. 3	8. 1 8. 3 8. 4 8. 5 8. 6	臨海県 台 州 天台山	使臣崇班(鄭珍) 蔵司 陳照寧(上名左都衛) 小船賃貸人 朱定(温州進士) 兵士4人(輜担) 長者 人力12人(天台山 輜担・人夫) 人力10人(天台県 錢担) 閩嶺南家 寺主恵日(景福院)

表C 成尋『日記』の登場人物

vol. 1	1072. 3. 15	壁 島	曾聚(十郎)・吳鏘(十郎)・鄭慶(三郎) 成尋・頼縁・快宗・聖秀・惟観・心賢・善久・長命 永智・尋源・快尋・良徳・一能・翁丸
	3. 20	濟州島	唐人 2 人
	3. 22	海 中	林臯(廿郎：但島の林養の子)
	3. 28	小均山	沈小六郎
	4. 3	東茄山	福州商人
	4. 4	明 州	越州指南人
	4. 6	越 州	商人(鵝鳥売り)
	4. 8		越州人 客人 2 人
	4. 12	蕭山県	陳從 客人
	4. 14	杭 州	官人(眷属50~60人)
	4. 15		李思愷
	4. 16		問官(眷属数多) 官夫
	4. 17		張賓(三郎) 弾琴童 2 人
	4. 19		陳詠(一郎)
	4. 20		小船賃貸人
	4. 21		浴堂人
	4. 22		李二郎・火頭男・李愷(思愷?)・留守人・施十郎 大道芸人たち(楽人・傀儡師) 見物人 都督夫人(供数百人)
	4. 23		高麗船人
	4. 25		金剛般若会会主(宝乗寺)
	4. 26		都督(知州沈立) 見物人
	4. 27		州使者
	4. 28		州使者
	4. 29		州使者・轎子担 2 人 講堂(百余人) 大教主老僧(興教寺 梵臻?) 達観禅師(浄慈寺)
	4. 30		国清寺僧 4 人(允初等)
	5. 2		靈隠寺僧(徳讚) 明慶院浴堂僧
	5. 3		州使者 沈福(明州船)
	5. 4		則明(寿昌寺) 使者 徐貴(杭州捍江第三指揮・第五都長・行兵士) 州使者
	5. 5		州使者
	5. 6	蕭山県	綱手 主市司(官市務?) 轎子担 2 人?
	5. 7	越 州	官人 商人(米) 道士 教主闍梨(勅護聖禅院)
	5. 8	曹娥鎮	商人(薪)
	5. 10	剡 県	張九郎・母・錢小八郎・俗人 2 人
	5. 11	新昌県	雇夫 9 人・轎子担 4 人 家主(陳公店)
	5. 12	天台県	童行(仙桂郷阿弥陀仏堂) 家主(鄭一郎)
	5. 13	天台山	家主(旻十三・陳七叔・清) 仲芳(国清寺主)・利宣(副寺主)・仲文(監寺)
	5. 14		咸寧(明心院住持) 禹珪(寺主弟子)
	5. 15		鴻植闍梨(植教主)
	5. 18		老僧(金地定恵真身塔院住持) 副寺主・知事僧・老僧(大慈寺) 印成闍梨・知事僧(石梁寺)
	5. 19		賜紫 3 人(寿昌寺監寺等)
	5. 20	天台県	知県(仙尉秘書) 使者(仲芳) 轎担 2 人
	5. 21	天台山	文法大師(80余人齋会) 良玉
	5. 23		惟照闍梨・日宣闍梨
	5. 25		中式闍梨(赤城寺) 如爽・願初・釈賢・道新・元吉 行者禹昌(能書)
	5. 26	天台県	監酒官
	5. 27	台 州	茶院の老翁(百五歳)
	5. 28		知州少卿(錢暄)・通判郎中(安保衡)・推官秘書(孔文仲?)・都監大保・司理秘書 州使者 法曹秘書 伝人 陳四郎(名永?)
	5. 29		監酒殿直 覚希・久良・若明・覚照大師子章・監祝侍禁・子鴻(景德寺)
	6. 1		州使者 2 人